

授業改善のための授業分析法の開発

清水 広¹

授業を分析する方法を身に付け活用できるようになることは、より効果的な授業改善につながる。その分析法として、本県の全高等学校で実施されている「生徒による授業評価」と授業ビデオ記録を活用した分析法を開発することとした。開発した授業分析法を含めた授業分析法の使い方、授業分析のための資料収集の仕方、資料整理の仕方を「高等学校版 授業改善のための授業分析ガイドブック」としてまとめた。

はじめに

現行の学習指導要領のねらいである「生きる力」の育成のため、「生きる力」の知の側面である「確かな学力」は教科の授業を中心に身に付けさせることが求められている。そのため基礎・基本の確実な定着や思考力・判断力の向上、さらには表現力の育成につながる「生徒主体の授業」や「わかる授業」を実施できるよう、日々授業改善に取り組まなければならない。

本研究で対象とする本県高等学校における授業改善に向けた取組の現状は、平成 19 年 4 月に県教育委員会高校教育課より公表された「神奈川県立高等学校『生徒による授業評価』の結果」によれば、授業改善のための研究授業に対する取組は、前年度と比較すると実施しなかった学校が増加している。それとともに学校全体で実施している学校も減少しており、授業改善に向けた取組が積極的には行われていない現状が見える。

さらに、授業研究の際、協議のための資料としてアンケートを生徒対象に実施している学校はほとんど見られず、学校全体で年 2 回「生徒による授業評価」は行われているものの直接的に授業改善を行う上で生徒の授業に対する評価を取り入れた授業分析が行われていないことが分かる。

研究の目的

本研究は高等学校において、より積極的に授業改善に向けた取組が行えるように、授業改善を行う際に必要不可欠な授業分析法を、「生徒による授業評価」の取組をいかし、既存の授業分析法を踏まえながら新たに開発することを目的とした。

あわせて、授業改善のための授業分析にかかわる内容をガイドブックにまとめることを目指した。

研究の内容

1 活発な授業改善を行うために

授業を分析するときに資料を用意せずに、授業場面を思い出しながら行うだけでは、主観的な分析の域を

越えることはできない。授業分析は授業という事実に基づいて行われるため、授業を振り返ることのできる客観的な資料を収集する必要がある。客観的な資料としては「授業者による授業評価記録」「生徒・参観者による授業評価記録」「音声記録」「ビデオ記録」「参観者による観察記録」がある。事実に基づく分析を行うためにはどれも意味のある資料である。

個人で取り組む授業改善は、日々の授業者による授業評価と生徒による授業評価が基本的な資料となる。なおビデオ記録や音声記録を資料として用いる場合は、授業者自身が気付いていない自分の癖などの特性を把握することが可能である。このような個人で取り組む授業改善が最初の一步である。

グループや学校全体で取り組む授業改善は、事後の授業研究会だけに参加するのではなく、研究授業案の事前検討、研究授業当日の資料収集と収集整理の分担などに組織的に取り組むことが必要である。

2 授業改善シートによる授業分析法

日々の授業を対象にして個人で取り組む授業改善の取組として、授業改善シートを活用した授業分析法を開発することにした。授業改善シートの例は第 1 表に示したもので、授業者が授業終了後その場で授業を振り返り、感じたままをそのシートに書き留めて、その内容を分析して次の授業にすぐにかかす分析法である。

本県の県立高等学校で平成 17 年度より、「生徒の確かな学力を育成するため、各学校における教育の指導力の向上や授業改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とする。」ことを目的として、夏季休業前と冬季休業前の年 2 回、すべての学校で全生徒を対象に「生徒による授業評価」を実施している。

授業改善シート評価項目は、「生徒による授業評価」で各学校の共通評価項目である「授業の準備、教材の工夫」「授業の充実感」「授業の進め方」「生徒主体の授業の工夫」「説明の分かりやすさ」「生徒への接し方」「生徒自身の学習への取組」「生徒自身の態度・姿勢」の八項目の中から生徒自身の取組状況の二項目を除く六項目とすることで授業者自身による自己評価

第1表 授業改善シート

授業日 / ()年()組 ()校時	
授業の準備、教材の工夫	今日の授業で良かった点
授業の充実	
授業の進め方	
生徒主体の授業の工夫	改善しなければならない点
説明の分かりやすさ	
生徒への接し方	

と学習者による評価項目を一致させることにした。

授業者は授業ごとに授業を振り返り、授業改善シートに書き込むことで次の授業の組立てにいかすことができる。それとともに資料を蓄積することで単元(題材)ごとなど一つのまとまりを分析することにも役立てることが可能になる。その際には年二回実施される「生徒による授業評価」ではなく、第2表に示す学習者による授業評価シートを使い、単元(題材)ごとに適宜授業評価を実施し、教師の主観による一方向だけの分析ではなく、授業者と生徒の双方向の評価結果に基づいた分析が大切になる。

第2表 学習者による授業評価シート

【生徒用】 実施日 平成 年 月 日

授業評価シート(授業状況と自己学習状況)

年 組 氏名

(教科 科目):学習単元(題材)『 』の授業について聞かせてください。

4(そう思う) 3(ややそう思う) 2(あまり思わない) 1(思わない)

項目	評価項目	評価状況
授業の進め方	1 今日学習の目標(ねらい)に対する説明があった。	4 3 2 1 1
	2 クラス全体の学習状況に応じて進められる授業だった。	4 3 2 1 2
	3 生徒の発言や発表など生徒自らが考えた内容を取り上げられる授業だった。	4 3 2 1 3
生徒主体の授業の工夫	4 生徒一人ひとりが積極的に参加できる授業だった。	4 3 2 1 4
	5 自ら考えたり、自ら取り組んだりすることができる授業だった。	4 3 2 1 5
説明の分かりやすさ	6 理解度に応じた説明や指示があった。	4 3 2 1 6
	7 端的でポイント押さえた説明があった。	4 3 2 1 7
	8 学習の流れや関連、ポイントがよく分かる板書だった。	4 3 2 1 8
	9 先生が用意した教材・教具は学習に役立った。	4 3 2 1 9
生徒への接し方	10 良い点をほめてくれたりして認めてくれた。	4 3 2 1 10
	11 授業の中で一人ひとりの状況に応じたアドバイスをしてくれた。	4 3 2 1 11
自己学習状況	12 内容を理解しようと取り組んだ。	4 3 2 1 12
	13 自分自身で考えるようにした。	4 3 2 1 13
	14 予習をして授業に臨んでいた。	4 3 2 1 14
	15 復習をして授業に臨んでいた。	4 3 2 1 15

【次の項目について具体的に記入して下さい。】

<興味・関心をもったところ>

<難しかったところ>

【自由記述】

授業についての感想や授業に対する要望などを記述する欄として活用してください。

授業改善シートを使った授業分析は地道な日々の積み重ねが大切であるとともに、シートをそのままにせずに評価項目ごとの自己評価と「今日の授業でよかった点」「改善しなければならない点」からどこに課題があるかをより把握しやすくするためにシートを整理するなどの手立てが必要である。

3 学習者による授業評価を活用した授業分析法

個人の取組ではなく教科研究会等のグループや学校全体で取り組む授業分析法の一つとして「2 授業改善シートによる授業分析法」で示した「第2表 学習者による授業評価シート」を活用した授業分析法を開発することにした。

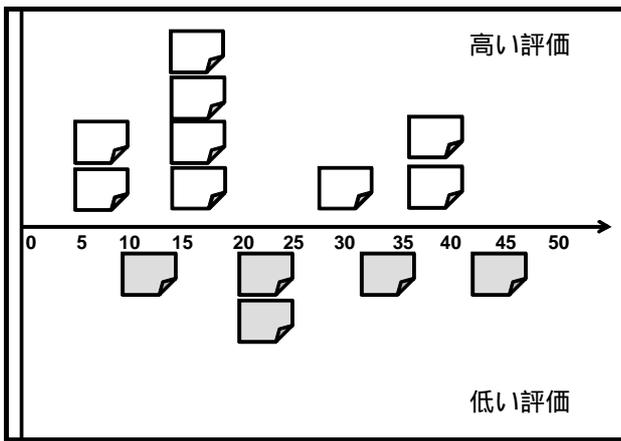
分析を行う授業について、学習者による授業評価を実施し集計する。集計結果から学習者が「そう思う」と評価した高い評価項目はどの場面、どのようなことが行われていたのか、また、「そう思う」と評価しなかった項目はどの場面、どのようなことが行われていたのかを探り、どのようにしたら授業改善が図れるかを協議していく分析法である。

この分析法は学習者による授業評価の結果に基づいて行うので、その授業を直接参観して分析するものではない。そのために授業をビデオに記録する必要がある。

分析法の流れは 授業をビデオ撮影する 学習者による授業評価を実施する 学習者の授業評価を集計する 分析する評価項目を決定する ビデオを視聴する ビデオを視聴しながら第3表のコメント記入カードに改善点などを記入する カードを第1図のように時系列に整理する 参加者全員でカードに基づいて協議する 形をとるものである。この分析法は学習者である生徒の授業評価を活用するため、より客観的な分析は可能になるが、学習者による評価が大きく関係するため、生徒による自己評価の能力を学校全体で高めていくことが必要である。また、データを集計して、分析を行う項目を把握するなどの事前の準備作業が必要となり、研究授業を実施してすぐに行う授業分析には向かない。

第3表 コメント記入カード

<p>評価者</p> <p>授業開始から経過時間 _____分頃</p> <p>この場面で</p>	<p>高い評価</p>	<p>評価者</p> <p>授業開始から経過時間 _____分頃</p> <p>この場面は自分だったら</p>
		<p>する。</p>



第1図 評価カードの時系列整理

4 評価カードを用いた授業分析法

「3 学習者による授業評価を活用した授業分析法」と同様に、収録した授業のビデオを再生しながら、第4表に示す評価カードで分析を行う。

小倉(2006)を参考に授業者の指導に関して、肯定的な評価(+評価)と否定的な評価(-評価)を感じたら授業評価の項目の該当するところに印を付け、その具体的内容は評価コメント欄に記入する評価カードを作成した。ビデオの視聴後、記入された評価カードを分類し、確認した後に、互いの授業観を基に協議する授業分析法である。

分析法の流れは 授業をビデオ撮影する ビデオを視聴する 評価カードへ記入する 参加者全員で評価カードを分類する 分類結果を確認する

分類結果から個々に第5表に示す総合評価票へ記入する 総合評価票に基づいて評価者各自が報告し、評価の全体像を把握する 評価の全体像から、協議の柱を立て授業改善に向けた話し合いをする 形である。第4表 評価カード

「評価カード」		評価者	<input type="text"/>
授業開始からの経過時間		分頃	<input type="text"/>
授業評価の項目		+評価 -評価	
授業の進め方	生徒が授業のねらいや内容を確認する場面が用意されている。		
	生徒の学習状況を把握する場面が用意されている。		
生徒主体の授業の工夫	生徒の発言や発表など生徒自らが考えた内容を取り上げる場面が用意されている。		
	生徒一人ひとりが積極的に授業に参加できる場面が用意されている。		
説明の分かりやすさ	自ら考えたり、自ら取り組んだりする主体的な学習活動の場面が用意されている。		
	生徒の理解に応じて再度説明や指示をしたりする場面が用意されている。		
生徒への接し方	分かりやすい説明をする工夫がみられる場面が用意されている。		
	学習の流れや関連、ポイントがよく分かる板書が行われている。		
	良い点をほめたりして学習意欲の向上につながる場面が用意されている。		
	机間指導等で指導支援する場面が用意されている。		
評価コメント			
<input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>			

評価カードの評価項目は、先に取り上げた「2 授業改善シートによる授業分析法」「3 学習者による授業評価を活用した授業分析法」と同様に「生徒による授業評価」の評価項目を参考にした。

この分析法は直接授業参観しながら評価カードを書き込んでいくことも可能である。しかし、実際に行われる授業は一過性なものであり、参観者の行う評価もその場で瞬時に判断することが必要になる。そこで直接授業を参観した後に再度ビデオを再生して評価カードに書き込んでいく方法を用いるとよい。また、否定的な評価(-評価)は行わないで肯定的な評価(+評価)だけで行う方法もある。

この分析法は参加型の授業分析であり参加者個々の授業観や指導観に触れることがより可能な分析法である。

第5表 総合評価票

総合評価票					
評価者					
評価1: この授業を下の表の4つの評価項目で総合的に評価してください。					
「特に評価できるは4」、「評価できるは3」、「やや評価できるは2」、「評価できないは1」の4段階の尺度とします。4段階で最も適当と思われる番号を で囲んでください。					
1	授業の進め方	4	3	2	1
2	生徒主体の授業の工夫	4	3	2	1
3	説明の分かりやすさ	4	3	2	1
4	生徒への接し方	4	3	2	1
評価2: ビデオ視聴から、この授業で良かった点を具体的に書いてください。					
評価3: ビデオ視聴から、改善が望まれる点を具体的に書いてください。					
評価4: ビデオ視聴から、この授業に関する全体的な印象を書いてください。					

5 対話場面における授業分析法

討論などにおいて、生徒の発言内容を取上げ、生徒自身の考えをより明確にしたり、生徒の思考を深めたりするためには授業のどこの場面で、どのような働きかけをすればよかったのかを分析する授業分析法である。この分析はバーコピッツとギブスの研究で利用している対話分析を、高垣(2005)がわが国の教授学習場面に適用するように改変した、相互作用のある発話の質的分析カテゴリー(第6表)のうち、生徒の認知をゆさぶる操作的発話のカテゴリーを基にして行うものである。

分析法の流れは 授業をビデオ撮影する ビデオを視聴しながらカテゴリーに基づき表出場面の洗い出しをする 表出した場面をビデオで確認する 表出場面について協議する という形である。表出場面

第6表 発話の質的分析カテゴリー（2005 高垣より作成）(p.8)

	カテゴリー	分類基準
1 表 象 的 発 話	a 課題の提示	話し合いのテーマや論点を提示する。
	b フィードバックの要請	提示された課題や発話内容に対して、コメントを求める。
	c 正当化の要請	主張内容に対して、正当化する理由を求める。
	d 主張	自分の意見や解釈を提示する。
	e 言い換え	自己の主張や他者の主張と、同じ内容を繰り返して述べる。
2 操 作 的 発 話	a 拡張	自己の主張や他者の主張に、別の内容を付け加えて述べる。
	b 矛盾	他者の主張の矛盾点を、根拠を明らかにしながら指摘する。
	c 比較的批判	自己の主張が他者の示した主張と相容れない理由を述べながら、反論する。
	d 精緻化	自己の主張や他者の主張に、新たな根拠を付け加えて説明し直す。
	e 統合	自己の主張や他者の主張を理解し、共通基盤の観点から説明し直す。

の洗い出しにおいて、特に注目したい分析のカテゴリーは「2a 拡張」で、この発言を教師が取り上げて授業を展開していくことが生徒の思考を深めるために必要であり、逃してはならない。

この分析法は生徒の発言内容を取り上げるために、より正確に聞き取ることが大切である。そのためにビデオ記録だけでなく逐語記録が作成されていることが望ましく、分析のための準備の時間に多くの時間が必要なため組織的に取り組むことが必要になる。

6 授業改善のための授業分析ガイドブック作成

平成18年度の研究事業「授業分析法の開発のための調査」を踏まえ授業分析にかかわる内容を整理、研究した成果について、高等学校での授業改善に取り組む際のガイドとなるように冊子としてまとめた。

ガイドブックの構成は第1章では授業改善に取り組む必要性について、第2章では授業研究への取組について、第3章では客観的に振り返るための資料収集の仕方について、第4章では収集した資料整理の仕方について、第5章では個人、グループ、学校全体で取り組む授業分析法について、第6章では組織的に取り組む授業研究について、第7章では授業分析や授業改善に役立つ内容についてである。

研究のまとめ

「生徒による授業評価」と関連させた授業分析法とビデオ記録を活用した授業分析法の開発に取り組ん

だ。「生徒による授業評価」の評価項目で日々の授業を分析することで時期を逃さずに授業改善をすることができ、「生徒による授業評価」でみられる課題への改善につなげることが期待できる。また、ビデオ記録を活用した研究協議はより客観的に授業という事実をとらえることができるため有効である。

各学校の実情を踏まえ授業改善のための取組はいろいろな方法でなされているが、まずは自分の授業を客観的に見直すことから始めるとともに、生徒を含めた第三者による評価を取り入れた授業改善に組織的に取り組む必要がある。

おわりに

本研究が今後の各学校での授業改善のための授業分析の参考となることを願うとともに、各学校の取組をより支援するため、さらに活用しやすい授業分析法の開発に取り組んでいきたい。

最後になるが、高垣マユミ鎌倉女子大学教授には、御多忙にもかかわらず、本研究のスーパーバイザーとして御助言を頂き、心よりお礼申し上げます。また、調査研究協力員の先生方にも感謝申し上げます。

[調査研究協力員]

県立神奈川総合高等学校 石橋 篤
 県立湘南台高等学校 長島 和子
 県立逗子高等学校 浅井 祐一
 県立相模大野高等学校 國松 稔之
 県立大和西高等学校 臼井 勇

[助言者]

鎌倉女子大学 高垣 マユミ

引用文献

高垣マユミ 2005 『授業デザインの最前線 理論と実践をつなぐ知のコラボレーション』北大路書房 p.8

参考文献

神奈川県教育委員会 2007 「神奈川県立高等学校『生徒による授業評価』の結果」
 小倉康 2004 「わが国と諸外国における理科授業のビデオ分析とその教師教育への活用効果の研究」
 清水広 2007 「授業分析法の開発のための調査」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第26集)
 吉田佳恵 2005 「評価者間の比較による授業評価システム」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第24集)